高良玉垂命とは誰か———筑後古代史の謎への挑戦

河野雄一

1 はじめに

本稿の目的は、高良玉垂命の正体を解明することである。高良玉垂宮とは、福岡県久留米市御井町に所在する筑後国一宮で、筑後の国魂として筑後地域や有明海沿岸を中心に信仰圏を有しており、高良大社とも呼ばれている。高良大社歴史年表によれば、仲哀九年に神功皇后が仲哀天皇とともに行幸した際に高良山に滞在し、朝鮮半島に出兵した際には高良の神が援け、仁徳五五年には高良の神（玉垂命）が高良山に鎮座し、履中元年に社殿が創建され玉垂宮と称したと伝えられる[1]。現在、高良大社や高良山の高良は「コウラ」と呼ばれているが、中世の古文書では「カハラ」、「かはら」、「かわら」、中世末の『高良玉垂宮神秘書』では「カウラ」と仮名書きされていた[2]。

また、高良玉垂命とは、高良大社でお祀りしている神々の中で主神として中央に位置している高良の神の御神号である。高良玉垂命は、蒙古襲来の文永・弘安の役の際に綸旨を賜ったことから「武運長久の神」、高良神楽発祥の地であることから「芸能の神」として崇敬を集め、厄除け・延命長寿・交通安全をはじめ生活全般を守る神として信仰されてきた[3]。『続日本後紀』、『文徳実録』、『日本三代実録』では「高良玉垂神」あるいは「高良玉垂命神」とあるのに対し、『日本紀略』では「高良神」とされており、正確な年月は不明であるものの、相殿の左に八幡大神、右に住吉大神が合祀されるようになった[4]。

しかし、高良玉垂宮の祭神である高良玉垂命の正体を巡っては諸説あって衆目の一致をみていない。そこで、本稿は、高良玉垂宮以外の神社に残る伝承や『八幡愚童訓』との関係から、高良玉垂命が時代の変化に従って変容したプロセスを踏まえてその正体に迫ることによって、高良玉垂命をめぐる千年来の論

---

[1] 高良大社ホームページ「高良大社歴史年表」。2023 年 2 月 5 日閲覧。
http://www.kourataisya.or.jp/kourataisya/nenpyou； 綾杉るな『神功皇后伝承を歩く ----福岡県の神社ガイドブック（上）』不知火書房、2014 年、76 頁参照。

[2] 渡邊正氣「高良玉垂命神社」、『式内社調査報告　第二十四巻　西海道』皇學館大学出版部、1978 年所収、73-81 頁、特に 75 頁。

[3] 高良大社ホームページ「ご祭神」。2023 年 2 月 5 日閲覧。
http://www.kourataisya.or.jp/kourataisya/saiji

[4] 渡邊、前掲論文、75-7 頁。

争に終止符を打つことを試みたい。

（１）諸学説の整理

『古事記』や『日本書紀』にも登場しない高良大社の祭神に関する諸説は、渡邊正氣による「高良玉垂命神社」の解説に詳しい[5]。渡邊によれば、「平安時代の中頃から、さらに神道と仏教が混然と融合した形で、高良山全体大きな発展をとげる。…かういふ状況下で、爾後長く神仏について種々の解釈が次々に生じ、史実と空想が入りみだれて、史実を明確にしがたくして明治の神仏分離までつづく」[6]。ここでは、神仏習合によって様々な解釈が生じ、空想も入り込んで史実が不分明となったことが示唆されているが、以下では渡邊に従って先行研究を整理しておきたい。

成立年代が定かではない『高良縁起』における物部祖神説では八幡神との関係が出てきて、鎌倉後期ないし南北朝前期に成立した『高良玉垂宮縁起』における藤大臣説では住吉との関係が出てくるが、中世末期の『高良玉垂宮神秘書』でそうした解釈は頂点に達する。一方、十一世紀には武内宿禰説も存在していたが、十二世紀前半の『師時記』によれば、大江匡房は武内説を否定して藤大臣説をとっていた。『師時記』を引用する『二十二社註式』には、玉垂命と武内宿禰併祀説も出てきて、石清水八幡宮に勧請の高良二社では、上高良が武内宿禰、下高良が玉垂命とされるが、下高良すなわち玉垂命を物部祖神とする考えも出てくる。南北朝時代には、『袖下抄』の女神説も誕生する。その後、寛文一〇年（一六七〇）には、祭神の高良玉垂命は武内宿禰であると定めた有馬藩の藩論が明治に至るまで主流となった。一方、『九州軍記』には物部胆咋説も登場し、幕末明治には青柳種信による中臣烏賊津連説や、矢野一貞・船曳鐵門による彦火々出見尊説が主張され、栗田寛も綿津見説から彦火々出見尊説へと移り、『特選神名牒』などでは、香春神と同神の新羅神説も出てきた。昭和になると、太田亮によって物部祖神説が力説されたが、戦後には古賀壽・山中耕作による水沼祖神説が出され、山中はさらに景行天皇説へと発展させた。また、近年では安曇海人の守護神説も登場している[7]。他方、神社側では、明治には武内宿禰

---

[5] 渡邊、前掲論文、73-81 頁。
[6] 渡邊、前掲論文、76 頁。ただし、旧字体は新字体に改変。
[7] 榊原英夫『景行天皇と巡る西海道歴史紀行――わが国の起源を求めて九州を歩こう』海鳥社、2006 年、178 頁。安曇族の中でも、特に「安曇磯良+海神」説などが提唱され

説から、六国史時代の高良玉垂命へと還ることになった[8]。

高良大社のホームページでは、ご祭神の「高良玉垂命」の下に博多人形の武内宿禰像の画像が示される一方[9]、ご由緒では仲哀天皇の治世下での筑紫への異国からの侵略を神功皇后が追い返した際、四王子嶺で神仏に助力を祈願した時に、住吉の神と共に顕現した神として高良玉垂命を捉えており[10]、高良大社自体でも高良玉垂命の正体がわからなくなるほど解釈が混乱した現状にある。

武内宿禰像　博多人形　小島与一作

（２）問題の所在

ている（綾杉、前掲書、79 頁）。

[8] 渡邊、前掲論文、77-9 頁。

[9] 高良大社ホームページ「ご祭神」。2023 年 2 月 5 日閲覧。
http://www.kourataisya.or.jp/kourataisya/saiji

[10] 高良大社ホームページ「ご由緒」。2023 年 2 月 5 日閲覧。
http://www.kourataisya.or.jp/kourataisya/yuisyo

高良玉垂命をめぐる諸学説は、しかしながら、相当初期の段階から八幡神や住吉との関係が認められ、特に縁起関係の学説には本来の信仰対象以外の影響を受けた解釈が顕著に認められる。吉田修作によれば、神功皇后伝承の生成には三段階が存在している。

> 神功皇后とそれに対する逆賊伝承には、特に六世紀から七世紀の北部九州を中心とした日本や朝鮮半島の情勢が反映されている。これが神功皇后伝承生成の第一段階である。その後、八世紀から九世紀に、神功皇后と応神天皇の伝承は八幡信仰と結びついて神社縁起の中で新たな生成を遂げ、中央にもたらされて勢力を拡大していった。更に、鎌倉時代には武運長久の思想の基に、元寇の際には、古代に新羅を征討したという対外的守護神として信仰の対象ともなった。これが神功皇后伝承生成の第二段階である。続いて、江戸時代の国学の隆盛期には、地方において古代の文献を調査し、土地の伝承と対照するという気運が生まれ、北部九州においても「筑前国続風土記」などが記述された。ここにおいて、古代の伝承と土地の伝説が結びつくという、神功皇后伝承の新たな展開がなされた。これが神功皇后伝承生成の第三段階である[11]。

このように、神功皇后伝承には三段階の後世の影響が認められる。それゆえ、吉田が、「今日において、その第二・第三段階の神功皇后伝承を第一段階と区別なく扱っている向きがあるのは遺憾なことである。各段階の区分けを認識しつつ、地域の伝承を理解することが肝要である。そこにおいてはじめて地域の伝承を問う意味を見出すことが出来る」[12]と指摘しているように、神功皇后伝承と少なからぬ関係がある高良玉垂命の研究においても、こうした後世の段階的影響を考慮する必要があるだろう。

以下の第二節では、大善寺玉垂宮の鬼夜伝承における藤大臣とは武内宿禰であることを明らかにし、第三節では、武内宿禰が藤大臣の三条件に矛盾しないかを検討し、第四節では、石清水八幡宮の祭神や『八幡愚童訓』を参考に大善寺玉垂命と高良玉垂命が同一かどうか検討したうえで、結論として、高良玉垂

---

[11] 吉田修作「神功皇后伝承----神功皇后と土蜘蛛・羽白熊鷲」、『比較文化』2 号、福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要、2005 年 3 月、81-98 頁、特に 81-2 頁。
[12] 吉田、前掲論文、96 頁。

命は当初は祀っていたものとは分化したためにその正体がわからなくなっているということを示したい。

2 大善寺玉垂宮

大善寺玉垂宮は、高良玉垂宮とは兄弟の関係にありその兄と位置付けられている[13]。『新考三潴郡誌』によれば、大善寺の祠は「高良明神の原廟（一つの廟の外に重ねて作ったたまや）であって、後に僧徒が之を奪いとって、なおかつ己れの旧盧の号を称したのか又は神仏を混合し、本地垂跡の説に因って、新に伽藍を廟の側にもうけてこの号をつけたのか、その何れか」[14]だとされている。大善寺玉垂宮では、玉垂命、八幡大伸、住吉大神が祭神として祀られているが、玉垂命は藤大臣（とうのおとど）、高良大明神とも称されている。高良大明神という別称と玉垂命という名前からして、大善寺玉垂宮の祭神である玉垂命が高良玉垂命と無関係でないのは当然である。というのも、高良大社御鎮座と伝えられる仁徳五五年または七八年は、大善寺玉垂宮においても伝承が残る年代だからである。

> 藤大臣は、神功皇后の三韓出兵に大功があり、玉垂宮と神功皇后の関係が深い。『吉山旧記』によれば、藤大臣は仁徳天皇五五年に賊徒退治の勅命を受け、この地[大善寺]に下って筑紫を平定し、同五七年（三六九年）高村（大善寺の古名）に御宮を造営し筑紫の政事を行ったが、仁徳天皇七八年（三九〇年）にこの地に没し祀られ、高良玉垂宮と諡（おくりな）されたと伝えられます[15]。

ここでは、大善寺の玉垂命の別称である藤大臣の事績が具体的に語られている。すなわち、藤大臣は、①神功皇后の三韓出兵の功労者であり、②賊徒退治[16]の勅

---

[13] 綾杉るな『神功皇后伝承を歩く−−−−福岡県の神社ガイドブック（下）』不知火書房、2015 年、103 頁参照。

[14] 『新考三潴郡誌』福岡県三潴郡小学校教育振興会、1953 年、358 頁。ただし、旧字体は新字体に改変。

[15] 大善寺玉垂宮ホームページ。https://tamataregu.or.jp/about
2023 年 2 月 5 日閲覧。

[16] 賊徒とは、仁徳五六年に肥前国川上で藤大臣（玉垂命）に討たれた桜桃沈輪（ゆすらちんりん）のことであり、当該事績は大善寺玉垂宮の鬼夜（おによ）という火祭りの

命で筑紫を平定後に筑紫の政事に関与し、③筑紫で死没した人物ということになる。

ここで重要なことは、三韓出兵と筑紫の平定と政事に関与した歴史上の具体的人物として玉垂命を想定することが可能となるということである。それゆえ、先行研究における彦火々出見尊説や景行天皇説は、彼らがたとえ歴史上実在していたとしても、天皇家の系図から考えて神功皇后による三韓出兵の時期にはすでに存在しないはずであり、玉垂命の候補としては不適である。また、玉垂命は三韓出兵の功績者であって神功皇后自身ではなく、新羅は出兵された側であることから、香春神と同神の新羅神説も該当しないだろう。さらに、綿津見説に関しても、歴史上の具体的人物とは言えないことから無理があるだろう。

では、玉垂命と同一視される藤大臣とは誰のことなのか。まず神功皇后の当該時代に実際に大臣であったのは、成務天皇元年一月に任命された物部胆咋（もののべのいくいのむらじ）と、同三年一月に任命された武内宿禰であり[17]、中臣烏賊津連（なかとみのいかつのむらじ）にも雷大臣の別称がある。

高良玉垂命の正体を巡る先行研究には物部祖神説、物部胆咋説、中臣烏賊津臣説などもあったが、ここで先に検討しておきたい。物部胆咋は、景行三六年に娘の五十琴姫命（いごとひめのみこと）が景行天皇の妃となっており[18]、藤大臣が筑紫に下向する仁徳五五年に存命であったとは世代的に考え難い。というのも、仁徳五十年には仁徳天皇と武内宿禰が歌のやり取りをして、武内宿禰が国の第一の長寿だと言祝がれているからである

> たまきはる　内（うち）の朝臣（あそ）　汝（な）こそは　世の遠人（とほひと）　汝こそは　国の長人（ながひと）　秋津嶋（あきづしま）　倭（やまと）の国に　雁（かり）産（こ）むと　汝は聞かすや[19]

由来となっている。ただし、吉田修作は、沈輪の話も『八幡愚童訓』を下地にして元寇の影響を受けたものとして捉えている（吉田修作「神功皇后伝承----肥前から壱岐へ」、『人文学部』16 号、福岡女学院大学紀要、2006 年 2 月、1-21 頁、特に 10 頁）。しかし、沈輪の話は、大善寺の伝承によれば仁徳天皇の時代のこととされており、神功皇后による三韓出兵の後の時代に位置付けられていることから、塵輪（じんりん）の話と同様に単純に『八幡愚童訓』の影響として片付けてしまうことには疑問の余地があるだろう。

[17] 『先代旧事本紀注釈』工藤浩・松本直樹・松本弘毅・訳、花鳥社、2022 年、巻第七、391 頁;『日本書紀（二）』坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注、岩波文庫、1994、巻第七、116 頁。

[18] 『先代旧事本紀注釈』、巻第七、383 頁。

[19] 『日本書紀（二）』、巻第十一、268-9 頁。

次節でも触れるように、武内宿禰の子供たちが朝鮮半島で活躍するのが神功皇后、応神天皇、仁徳天皇の時代であることから、子供の世代を比較しても、また大臣に任命された順番からしても、物部胆咋は武内宿禰よりも年長者であると考えられる。それゆえ、物部祖神説、物部胆咋説も玉垂命の候補としては不適である。

また、中臣烏賊津連は、允恭七年にも中臣烏賊津使主（なかとみのいかつのおみ）という名前が見え[20]、両者が同一人物であるなら、中臣烏賊津連は藤大臣が死没した仁徳七八年を超えて允恭期まで存命であったことになる[21]。また、対馬の太祝詞神社（ふとのりとじんじゃ）の境内には、中臣烏賊津連とされる雷大臣の墓が伝わっている。中臣烏賊津連に関しては賊徒退治の事績も伝えられておらず、允恭期まで存命で死没地も伝承の通りだとすれば、中臣烏賊津連も玉垂命の候補から外れることになる。

高良玉垂命をめぐる先行研究において、武内宿禰以外で、大善寺玉垂宮の藤大臣の三条件に最も近い人物をあらかじめ検討しておくと、水沼祖神説になる。というのも、水沼別（みぬまわけ）の始祖である国乳別皇子（くにちわけのみこ）は、神功皇后征韓の際の弓大将であったからである[22]。景行天皇の皇子であ

---

[20] 『日本書紀（二）』、巻第十三、318 頁。

[21] ただし、ここでの中臣烏賊津使主は大臣としてではなく舎人（とねり）として登場している。

[22] 綾杉、前掲書（下）、21 頁。『先代旧事本紀注釈』では、筑紫君磐井を討伐した物部麁鹿火の弟の物部阿遲古が水間君等の祖とされる一方（巻第五、238-9 頁）、景行天皇の皇子の武国凝別皇子（たけくにこりわけのみこ）が筑紫水間君の祖とされているが、国乳別皇子が伊予宇和別の祖とされていることからすれば、『先代旧事本紀注釈』は武国凝別皇子と国乳別皇子を取り違えていると思われる（巻第七、386-7 頁）。

邪馬台国の官名のひとつ「弥馬獲支」（『新訂　魏志倭人伝・後漢書東夷伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝――中国正史日　本伝（１）』石原道博編訳、岩波文庫、新訂版、1985 年、41 頁）の読みが稲荷山古墳鉄剣銘「獲加多支鹵」（わかたける）から類推して「みまわけ」であるならば、音の響きの近さから水沼別（みぬまわけ）と何らかの関係があるかもしれない。また、同様に邪馬台国の官名の「弥馬升」は宋本『太平御覧』では「弥馬叔」となっており（同書、41-2 頁、脚注（5））、音の類似から「叔」は宿禰（足尼）を表している可能性も考えられ、「弥馬升」はあるいは国乳別皇子の同母兄弟の国背別皇子（くにそわけのみこ）を祖とする水間君のことかもしれない（『先代旧事本紀注釈』、巻第七、386-7 頁）。

ただし、『魏志倭人伝』において卑弥呼の死後に殉死が行われて、倭の地には牛馬はいないとされている一方（『魏志倭人伝』、前掲書、53, 46 頁）、垂仁天皇二十八年に殉死を禁止して同三十二年には埴輪に替えており（『日本書紀（二）』、巻第六、40-2 頁）、「肥前風土記」において松浦郡値嘉嶋では景行天皇の時代に牛馬が豊富だとされている

った国乳別皇子[23]は、高三瀦（たかみずま）の地に在所を定めて筑紫地方を治め、弓頭大明神として弓頭神社で祀られており、その墓は神社近くの烏帽子塚（弓頭神社御廟塚）だと伝えられている[24]。ただし、国乳別皇子が賊徒退治の折に筑紫に下向したか、あるいは実際に賊徒退治を行ったか否かに関する伝承は伝えられていない。吉田修作は「祖先説の中では水沼君祖先説が浮上するが、それ以上は文献的確証に乏しい。その他の武内宿禰は神功皇后の神がかりなどの場面で活躍したと伝える伝説的大臣だが、高良との関わりは見当たらない」と述べており、武内宿禰は高良玉垂命と無関係だと捉えている[25]。

しかし、『新考三瀦郡誌』では、藤大臣の正体がより端的に直接示されている。

> 仁徳天皇の五十一年、肥前の国の桜桃（ゆすら）沈輪がくわだてをして、異国へ内通して悪徒を集め、諸所で乱暴をするということが百姓等からしきりに訴えられた。そこで、同帝の五十五年十二月に勅命に従って藤大臣（武内宿禰）が難波の高津の宮を出られ、同月二十四日に筑後塚崎の葦連（あしのむらじ）（塚崎の薬師寺姓の祖という）の館に御着きになった。（中略）大臣（おおみ）は秘計をめぐらして同帝の五十六年正月七日、類賊をのこさず退治された[26]。

このように、桜桃沈輪を退治した藤大臣と武内宿禰は同一人物だと考えられている。それゆえ、高良玉垂命の正体を巡る先行研究における藤大臣説も武内宿禰説も、その片方だけでは片手落ちで不十分と言えるのかもしれない。次節では、武内宿禰が大善寺玉垂宮の三条件に矛盾しないか順に検討していきたい。

3 藤大臣の三条件

ことからすれば（「肥前風土記」、『風土記』中村啓信監修・注釈、角川ソフィア文庫、2015 年、85 頁）、卑弥呼の時代は纏向を本拠地とした垂仁・景行期よりも前の時代と考えられる。一方、水沼別や水間君の起源が景行天皇になるとすれば、卑弥呼の時代と景行天皇の時代の先後関係が逆転することになるから、「弥馬獲支」と「弥馬升」に関するここでの考察はいずれも臆測の域を出ないことを付言しなければならない。

[23] 『日本書紀（二）』、巻第七、64 頁。

[24] 綾杉、前掲書（下）、21 頁。

[25] 吉田修作「神功皇后伝承――筑前・筑後の境界周辺地域を中心として」、『比較文化』3 号、福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要、2006 年 3 月、15-33 頁、特に 19 頁

[26] 『新考三瀦郡誌』、359 頁。同様の話が久留米弁で語られている松田康夫『久留米ん昔話』久留米郷土研究会、1978 年、66-7 頁、「鬼夜」の項も参照。

（１）三韓出兵

前節で見たように、神功皇后の三韓出兵の功労者ということが玉垂命の条件であった。そこで、本項では、三韓出兵の功労者について検討したい。

三韓出兵の参加者を正確に把握するのは困難であるが、仲哀天皇の死後に神功皇后とともに現れる群臣の一部であろう。『日本書紀』によれば、仲哀九年の天皇死の直後には、神功皇后とともに大臣武内宿禰のほか、中臣烏賊津連、大三輪大友主君（おおみわのおおともぬしのきみ）、物部胆咋連、大伴武以連（おおとものたけもつのむらじ）という「四の大夫」（よたりのまえつきみ）の名が見える[27]。

武内宿禰は、仲哀天皇の死の前後に神功皇后の傍にあって三韓出兵後の忍熊王の討伐にも参加していることから[28]、「三韓出兵の功労者」であることは不自然ではない。また、神功皇后自身の三韓出兵以後の応神・仁徳期の朝鮮半島との外交や軍事には、武内宿禰の子である葛城襲津彦（かづらき／かつらぎのそつびこ）、羽田矢代宿禰（はたのやしろのすくね）、蘇我石川宿禰（そがのいしかわのすくね）、平群木菟宿禰（へぐりのつくのすくね）、紀角宿禰（きのつののすくね）や、葛城襲津彦の子で武内宿禰の孫に当たる的戸田宿禰（いくはのとだのすくね）[29]なども携わっていることからすれば、武内宿禰自身が「三韓出兵の功労者」として朝鮮半島への一定の影響力を有していたと考えられる。

また、高良大社の宝物庫にあった高良大明神の神の鎧が、外国との戦いの際に、高良大明神が鎧を身につけて白馬に乗って戦いに加勢するために見えなくなるという逸話も、武内宿禰が三韓出兵に参加したことの傍証となると考えられる[30]。

---

[27] 同書、巻第八、134 頁。『先代旧事本紀注釈』によれば、四大夫に追加されている物部多遅麻連（もののべのたぢまのむらじ）は、神功皇后摂政元年には大連に任命されている（『先代旧事本紀注釈』、巻第七、399, 403 頁）。

[28] 『日本書紀（二）』、巻第八-九、132-66 頁。

[29] 仁徳十七年には砥田宿禰、仁徳五十八年には的臣（いくはのおみ）の祖（おや）盾人宿禰（たたひとのすくね）の表記もあるが同一人物である。

[30] 松田『久留米ん昔話』、151 頁、「高良山の鎧」の項を参照。ただし、当該鎧は 1586 年の島津氏による高良山焼打ちの際に消失し、彦山にあるという話も伝えられたが、高額の払い戻し料を要求されたため寂源座主が諦めたと伝えられている（同書、151-2 頁）。

（２）筑紫の政事

前項では、「三韓出兵の功労者」を検討してきたが、本項では武内宿禰が賊徒退治の勅命で筑紫を平定後に筑紫の政事に関与したかどうかを検討したい。

大善寺玉垂宮に伝わる仁徳天皇五五年とは異なるが、応神九年四月に「武内宿禰を筑紫に遣（つかは）して、百姓（おおみたから）を監察（み）しむ」[31]とあることから、武内宿禰が筑紫に下向して「筑紫の政事に関与」したことが『日本書紀』でも確認できる[32]。天保八年（1838 年）前後にほぼ成立したと見られる青柳種信『筑前國續風土記拾遺』の早良郡の記述でも、「其のかみ此[武内]大臣久しく筑紫に留りて國政を執給ひし故に其後裔當國に多く遺れるなるべし」[33]とあり、武内宿禰が筑紫に長く留まってその子孫の姓が早良郡の地名として名残を留めていることが示されている。

注目すべきは、赤司八幡神社の縁起「止誉比咩神社本跡縁記」（とよひめじんじゃほんせきえんぎ）では、武内宿禰の筑紫下向と高良玉垂命神社の関連が示唆されていることである。

> ９年４月、武内宿祢を筑紫に遣わし、左衛に居ませ、百姓を監察せしめる。後の人、神廟を起て、蚊田の渟名井(かだのぬない)の水を酌みて、浅水間の井(あさづまのい 朝妻井)に移し、これを祭る。高良玉垂命神社、これなり[34]。

この武内宿禰の筑紫下向の際に、その弟の甘美内宿禰（うましうちのすくね）が、「武内宿禰、常に天下（あめのした）を望（ねが）ふ情（こころ）有り。今聞く、筑紫に在（はべ）りて、密（ひそか）に謀りて曰（い）ふならく、『独（ひとり）筑紫を裂きて、三韓（みつのからくに）を招きて己に朝（したが）はしめて、遂に天下（あめのした）を有（たも）たむ』といふなり」と讒言したために応神天皇は武内宿禰を殺させようとしている[35]。当該讒言は、武内宿禰が筑

---

[31] 『日本書紀（二)』、巻第十、196 頁。

[32] 記紀には応神天皇と仁徳天皇の記述について、混乱や重複が複数見られる。

[33] 青柳種信『筑前國續風土記拾遺 下巻』文献出版、1993 年、巻之四三、170 頁。

[34] 「止誉比咩神社本跡縁記」自体にはアクセスできず未読のままであり、宮原誠一氏のブログ https://ameblo.jp/kenbuncho2017/entry-12385375262.html より引用。2023 年 2 月 5 日閲覧。

[35] 『日本書紀（二)』、巻第十、196-8 頁。この讒言で武内宿禰の身代わりとなって自害

紫において独自の勢力を築いて朝鮮半島との外交権も掌握して威勢を示すほどの権勢があったことを示唆しており、前項で検討した「三韓出兵の功労者」に武内宿禰が該当することを示す傍証となりうるだろう。

この讒言によって武内宿禰は筑紫を去り、天皇の前で弁明して甘美内宿禰と共に探湯（くかたち）をして勝利するが[36]、そのあとに再度高良山に来て筑紫を統治したと伝えられている[37]。

（３）死没地

武内宿禰の死没年に関しては定かではないものの、仁徳五五年に因幡国の宇部山で沓を残して行方不明になったという伝承[38]、『水鏡』によれば同年に死去したという伝承、『帝王編年記』や『公卿補任』によれば仁徳七八年に死去したという伝承などがある[39]。また、武内宿禰が行方不明になったり死去したりしたという伝承がある仁徳五五年は、藤大臣が賊徒退治の勅命を受けて筑紫に下向したという大善寺玉垂宮の伝承の年と一致し、同様に武内宿禰が死去したという伝承がある仁徳七八年は、藤大臣が大善寺の地で没した大善寺玉垂宮の伝承の年とも一致する。

武内宿禰の墓については、允恭天皇五年七月に葛城襲津彦の孫、すなわち武内宿禰の曾孫にあたる玉田宿禰（たまだのすくね）が、地震の際に武内宿禰の墓域に逃げ隠れたという記述がある[40]。玉田宿禰の本拠地は葛城であるが、武内宿禰の墓は、『帝王編年記』仁徳記によれば大和国葛下郡、『大和志』によれば高市郡鳥屋村と伝えられる[41]。一方、宗像市鐘崎の織幡神社には、履中年間に武

した壱伎の直の祖（いきのあたいのおや）真根子（まねこ）は、山城の松尾社家伊伎系図によれば、武内宿禰の妹の忍媛命（おしひめのみこと）と中臣烏賊津連のあいだの子と言われることもあるが、『日本書紀』には見られない系図であることから、後世に作られた伝承にすぎないと吉田修作は考えている（吉田「神功皇后伝承−−−−肥前から壱岐へ」、12 頁）。

36 『日本書紀（二）』、巻第十、200 頁。

37 松田『久留米ん昔話』、131 頁、「高良山と武内宿禰」の項を参照。高良の神が高良山に登って筑紫の国を統治していることに関しては、同書 143 頁、「瀬戸坂」の項を参照。

38 「因幡国風土記」逸文、『風土記』、323 頁。

39 『風土記』、323 頁、注 1 を参照。

40 『日本書紀（二）』、巻第十三、314-6 頁。ただし、玉田宿禰は、雄略七年では葛城襲津彦の子とされており、伝承に異同が見られる。

41 同書、317 頁、注三を参照。

内宿禰が沓（くつ）を残して昇天したと伝えられる「沓塚」が存在しており[42]、同様の鞜の逸話は高良大社にも残っている。高良玉垂命が鞜を奥の院の大杉の根元に残して高天原（たかまがはら）に昇天したため、鞜を形代として奥の院に小さな社を造って祀ったが、この鞜が高良大社の宝物庫に収められているという伝承があり[43]、高良大社奥宮も古くは「高良廟」「御神廟」あるいは「御霊廟」と称され、武内宿禰の葬所と伝えられている[44]。それゆえ、死没年や死没地に関して異説は存在するものの、高良大社奥宮が葬所であるならば、武内宿禰が筑紫の地で亡くなったとしても不自然ではない。

以上、武内宿禰が、大善寺玉垂宮の藤大臣の三条件に該当するかどうかを検討してきたが、死没年や死没地に関する異説を除けば、武内宿禰は藤大臣の三条件に矛盾しない。それゆえ、大善寺玉垂宮において藤大臣と同一視される玉垂命も武内宿禰であったと見てよいであろう。

4 大善寺玉垂命と高良玉垂命は同一か

（1）筑後地方の玉垂神社の祭神

前節では、藤大臣とは武内宿禰であることを見てきたが、大善寺における藤大臣こと玉垂命と高良玉垂命を同一の人物や神とみなして、高良玉垂命は武内宿禰であると結論づけてよいのだろうか。結論を先取りして述べれば、半分は正解で半分は違うということになるかもしれない。

高良大社の御神宝には、豊後の刀鍛冶の紀新大夫行平が船釘を材料にして造った一振りの刀があるとされるが、刀鍛冶と小姓の間で「我が神[高良]玉垂命は、もとをたどれば紀姓の出である」というやりとりが交わされている[45]。武内宿禰は、『日本書紀』では景行天皇から派遣されて紀伊に九年居住した屋主忍男武雄心命（やぬしおしをたけをごころのみこと）が紀直（きのあたい）の遠祖となる菟道彦（うじひこ）の娘の影媛を娶って生まれており[46]、武内宿禰自身が

---

[42] 綾杉、前掲書（上）、20 頁。
[43] 松田『久留米ん昔話』、150 頁、「高良大明神の鞜」の項を参照。
[44] 「玉垂宮賓殿及境内末社記」。
[45] 松田『久留米ん昔話』、151 頁、「船釘の神剣」の項を参照。
[46] 『日本書紀（二）』、巻第七、60 頁。なお、『古事記』では、武内宿禰は、比古布都押之信命（ひこふつおしのまことのみこと）と、木國造（きのくにのみやつこ）の祖、宇豆比古（うづひこ）の妹、山下影日売（やましたかげひめ）の間の子とされている。

紀臣（きのおみ）の祖である紀角宿禰の親である[47]。このように武内宿禰は紀伊国とも関係が深いことからすれば、高良大社における鞜や紀姓の出自の逸話は、高良玉垂命が武内宿禰であったことを示す傍証になるだろう。

高良大社では、高良大社自体と高良下宮社が存在しており、両社ともに高良玉垂命を祀っている。高良大社の祭神は高良玉垂命、八幡大神、住吉大神であるのに対して、高良下宮社の祭神は高良玉垂命、孝元天皇、素戔嗚尊となっている。しかし、下宮社の大正十一年の時点での祭神は高良玉垂命、物部胆咋連命、武内宿禰命となっており、高良玉垂命と武内宿禰を別神として扱っていた[48]。また、『高良玉垂神秘書』でも「高良明神」と「高良玉垂命」は別神として扱われている[49]。

祭神や由緒が不明な神社は割愛するが、筑後地方の各地の玉垂神社の祭神に関して検討しておきたい。大善寺玉垂宮と太刀洗の本郷玉垂神社も高良大社と同様に八幡大神、住吉大神を祀っているが、大善寺は玉垂命、本郷玉垂神社と高良大社では高良玉垂命を祀っている点で微妙な違いが存在する。大牟田の黒崎玉垂神社では武内宿禰命、応神天皇、神功皇后、建磐龍命、住吉大神となっており、大木町侍島の高良玉垂神社では、武内宿禰、少童三神、応神天皇となっており、応神天皇＝八幡大神、少童三神＝住吉大神と考えれば、大牟田や大木町の玉垂神社でも高良大社や大善寺と同様に八幡大神、住吉大神を祀っていると捉えることができる。

しかし、大牟田や大木町では高良玉垂命や玉垂命の代わりに武内宿禰を祀っている点で高良大社や大善寺と異なってはいるものの、高良玉垂命や玉垂命が武内宿禰であると捉えると、大牟田や大木町でも高良大社や大善寺と同様の神を祀っていることになる。柳川市三橋町の上起田玉垂神社の祭神は武内宿禰、住吉神、菅原道真であり、応神天皇の代わりに菅原道真になっているが、武内宿禰、住吉神は大木町と共通している。筑後市の三つの玉垂神社の祭神は、井田の井上玉垂神社が武内宿禰、長浜の玉垂命神社が玉垂命、島田の富久高良玉垂神社が大己貴命となっており、大分県日田の玉垂神社でも祭神は武内宿禰となっている。久留米市野中町の野中玉垂御子神社では、斯礼賀志命、大山咋命を祀っているが、玉垂命自体ではなく玉垂命の子供と考えられる斯礼賀志命を祀っている点で少し毛色が異なっている。

---

[47] 水谷千秋『日本の古代豪族 100』講談社現代新書、2022 年、115-6 頁。
[48] 綾杉、前掲書（上）、78-9 頁。
[49] 綾杉、同書、同頁。

このように筑後地方を中心とした各地の玉垂神社の祭神からは、玉垂命あるいは武内宿禰が主神として祀られているという傾向が浮かび上がってくる。それでは、高良玉垂命＝武内宿禰と最終的に断定してしまっても構わないのであろうか。

（２）石清水八幡宮と『八幡愚童訓』

先行研究には『二十二社註式』における玉垂命と武内宿禰併祀説があったが[50]、ここで参考になるのが、石清水八幡宮である。実際に、高良大社は当初は宇佐八幡宮の信仰圏に入っていたものの、石清水八幡宮の摂社に加わっていたことが、寛文四年（1247）の後嵯峨院による石清水八幡宮行幸や、『徒然草』52 段における仁和寺の法師による石清水八幡宮の麓の高良社への参拝などから裏付けられる[51]。

石清水八幡宮では、上高良では武内宿禰、下高良では玉垂命を祀っている。こうした石清水八幡宮のあり方は、元々高良大社で武内宿禰を高良玉垂命として祀っていたものの、途中で武内宿禰とは別物として高良玉垂命を考えるようになって武内宿禰とは分けて祀るようになったことを示唆している。このことを裏付けるのが『八幡愚童訓』である。吉田修作によれば、「八幡愚童訓を基に南北朝以前成立とされる高良玉垂宮縁起に、高良神である藤大臣を中心に記述されたことが石清水八幡宮との関係を端的に物語っている」[52]。

『八幡愚童訓』は、元寇後の鎌倉時代に石清水八幡宮の社僧によって書かれた寺社縁起と考えられている。先に見たように、大善寺玉垂宮では、玉垂命は藤大臣や高良大明神と同一のものと考えられており、藤大臣の正体は武内宿禰であった。しかし、『八幡愚童訓』では、藤大臣と武内宿禰は明確に区別されて別物として考えられている。

『八幡愚童訓』によれば、長門豊浦宮で仲哀天皇が異国から襲来した塵輪の流れ矢で亡くなった後、神功皇后が四王寺山に御行した際に、菩薩が俗躰となって顕現した彦波瀲尊（ひこなぎさのみこと）が召喚すると月神が空中に出現したが、この彦波瀲尊は住吉大明神、月神は高良大明神のことだとされている[53]。

---

[50] 渡邊、前掲論文、78 頁。
[51] 吉田「神功皇后伝承−−−−筑前・筑後の境界周辺地域を中心として」、20 頁。
[52] 吉田、同論文、同頁。
[53] 『愚童八幡訓　甲』、『寺社縁起』岩波書店、日本思想体系 20、1975 年所収、170-2

「去（さり）トテハ月神を奉レ遣」ト武内被レ申シヲ、住吉、大ニ呵（いか）リ給テ宣ク、「月神ハ忝モ天神也。争カ人王ノ使ニ可レ成。所詮除目（じもく）ヲ行テ官ヲ成テ可レ遣」トテ、藤大臣連保ト名付テ、磯良ノ許へ遣ル[54]。

このように、神功皇后による三韓征伐の際の楫取として安曇磯良を召抱える際に、武内宿禰は月神に藤大臣連保と名付けて、磯良のもとに派遣している。それゆえ、『八幡愚童訓』においては、高良大明神＝藤大臣は武内宿禰とも安曇磯良とも明確に区別されている。また、『愚童八幡訓』では、「副将軍ノ高良ニ仰テ乾珠ヲ海へ入給。此珠を投給フ故ニ、高良ヲバ玉垂宮トハ申也」[55]と述べられて玉垂宮の称号の起源が示されているが、乾珠を海に投げ入れたのは高良大明神であって安曇磯良ではない[56]。

ここで高良玉垂命に関して近年主張されている安曇磯良説も否定されることになる。安曇磯良は『日本書紀』において意図的に隠蔽されてその存在が消されているという見解もありうるが、逆にそもそも当時は存在していなかったにもかかわらず、後世に創り上げられた巷間の俗説が各地の神社の縁起や伝承に取り入れられてしまっている可能性を示している。というのも、『八幡愚童訓』に基づいて『高良玉垂宮縁起』や『高良玉垂宮神秘書』が書かれているのであれば、これらの縁起や神秘書は八幡信仰の影響を受けて元々の伝承とは異なるものになってしまっている可能性があるからである。それゆえ、『古事記』や『風土記』を重んじる『筑前国続風土記』では、安曇磯良は記紀の神功皇后の記事に見られないことから、磯良に関する伝承は現地の人々による牽強付会の説だとされている[57]。

頁。

[54] 『愚童八幡訓　甲』、172 頁。

[55] 『愚童八幡訓　甲』、176 頁。

[56] 神功皇后は記紀では本来、魚の助けによって新羅に渡ったにもかかわらず（『古事記』倉野憲司校注、岩波文庫、1963 年、134 頁；『日本書紀（二）』、巻第九、148 頁。）、潮満珠・潮旱珠の助けによって新羅に赴いたという八幡信仰が、彦火々出見が綿津見神から潮満珠・潮旱珠を得たという神話と結びついた結果、潮満珠・潮旱珠を接点にして彦火々出見神話と神功皇后神話が重層化したと吉田修作は捉えている（吉田修作「福岡の祭りに見られる恵比寿神と磯良神」、『比較文化』1 号、福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要、2004 年 3 月、69-87 頁、特に 84-5 頁。）。

[57] 吉田、「福岡の祭りに見られる恵比寿神と磯良神」、83 頁。ただし、吉田は「中世・

安曇磯良は志賀海神社の宮司の安曇氏の祖神とされているが[58]、安曇一族のなかで記紀や『風土記』に基づく歴史上最初に登場するのは、景行天皇の時代に士式嶋（ししきしま）から西の海を観察した阿曇連百足（あづみのむらじももたり）である[59]。神功皇后が新羅征討の際に資珂嶋（しかしま）に火を求めさせた時には大浜・小浜が登場するが[60]、この大浜は『日本書紀』で応神三年十一月に命令に従わなかった海人を平定して海人の統率者となった阿曇連の祖（おや）大浜宿禰（おおはまのすくね）と同一人物であろう。また、仁徳天皇の死後には、淡路の野嶋の海人、阿曇連浜子（黒友）が住吉仲皇子（すみのえのなかつみこ）の反乱に与した罰として顔に入れ墨をされている[61]。

ただし、先に述べたように、『日本書紀』や『風土記』において神功皇后が三韓出兵に先立って海路に哨戒や索敵をさせたのは、安曇磯良ではなく吾瓮海人烏摩呂（あへのあまをまろ）、磯鹿（しか）の海人草（くさ）[62]、大浜・小浜であり、『八幡愚童訓』において安曇磯良が海底に長年住んで顔に牡蠣をつけた人物として描写されていることからすれば[63]、安曇磯良の人物像には後世の造作や潤色による物語的要素が少なからず認められるのである。

中世以降、高良玉垂宮（高良大社）は、有明海沿岸に信仰圏を拡大し、大善寺玉垂宮や黒崎玉垂神社とは本社末社関係で結ばれており、筑後地域の信仰は八幡信仰の影響下にあったと指摘されている[64]。もし大善寺が八幡信仰の影響下にあったのであれば、藤大臣と武内宿禰は分離されているはずである。しかしながら、大善寺玉垂宮における藤大臣とは武内宿禰のことであった。そうなのであれば、大善寺には八幡信仰以前の古い伝承が残されている可能性が高いのである。

したがって、当初は一体であった藤大臣と武内宿禰が次第に分離したと考え

近世以降、磯良伝承が流布し定着していったことを考慮するならば、無下に磯良伝承を退けるわけにもいかない」と述べている（吉田、同論文、同頁）。

[58] 吉田、同論文、同頁。

[59] 「肥前国風土記」、『風土記』、84 頁。阿曇連百足は、孝徳天皇の時代にも「播磨国風土記」揖保郡の条に阿曇連太牟（たむ）と共に登場する（「播磨国風土記」、『風土記』、385 頁）。

[60] 「筑前国風土記逸文」、『風土記』、376 頁。

[61] 『日本書紀』巻第十二、280-90 頁; 水谷千秋『日本の古代豪族 100』講談社現代新書、2022 年、266-8 頁。

[62] 同書、巻第九、144-6 頁。

[63] 『愚童八幡訓　甲』、172 頁。

[64] 吉田「神功皇后伝承−−−−筑前・筑後の境界周辺地域を中心として」、20 頁。

られる。すなわち、大善寺玉垂宮の伝承では両者が一体であったにもかかわらず、すでに天平年中（740 年頃）には高良大社において武内宿禰は荒木田襲津彦[65]と共に相殿に祀られており[66]、八幡信仰の影響を受けて鎌倉時代の『八幡愚童訓』では両者が明確に分離している。このことは、奈良時代にはすでに高良玉垂命と武内宿禰が別物として考えられ始め、鎌倉時代にはそうした考えが書物としても定着するようになっていたことを意味しているのである。

その後、『八幡愚童訓』に基づいて『高良玉垂宮縁起』や『高良玉垂宮神秘書』が書かれたことによって、高良大社側でも高良玉垂命に関する解釈はますます混乱をきたすことになった。江戸時代になって有馬藩の藩論として武内宿禰を祀ることになったものの、明治に入って再び高良玉垂命を祀ることになった経緯は先行研究の整理で触れたとおりである。高良玉垂命とは誰かを図式的に示すならば、当初は高良玉垂命＝武内宿禰＝藤大臣であったものが、八幡信仰の影響によって武内宿禰を除外した高良玉垂命＝藤大臣となっていたが、江戸時代の藩論で再び高良玉垂命＝武内宿禰となり、明治に入って再び武内宿禰を分離した高良玉垂命だけになったということであろう。

こうした武内宿禰と高良玉垂命の分化は、意図せざる副産物としてもうひとつの重要な問題を示唆している。武内宿禰が桜桃沈輪討伐のために下向したのは仁徳五十五年であるが、もしこれが応神九年（398 年）[67]の武内宿禰の筑紫下向と同一の事柄であるとするならば、応神天皇が崩御した応神 41 年と仁徳天皇が崩御した仁徳八十七年は武内宿禰の筑紫下向の 32 年後となり、応神天皇と仁徳天皇の没年が一致する[68]。このような応神天皇と仁徳天皇の没年の一致は、あるいは単なる偶然の一致の可能性も否定できないが、池の設置や吉備巡行や枯野という船の話など記紀における両天皇の事績は酷似しており、応神仁徳同一人物説もあることから[69]、応神天皇と仁徳天皇の分化の可能性も将来的な研究課

---

[65] 葛城襲津彦のこと。

[66] 倉富了一『高良山物語』菊竹金文堂、1934 年の 11.「玉垂宮神考」を参照。
http://snk.or.jp/cda/kourataisya/11tamatare.html

[67] 神功皇后 55 年（375 年）から応神天皇 25 年（414 年）までは実年の特定が可能と考えられている（田中俊明「『日本書紀』朝鮮関係記事と百済三書」『京都産業大学日本文化研究所紀要』第 26 号、2021 年 3 月、232-178 頁、特に 196-190 頁参照）。

[68] 実年の特定が可能な応神 25 年を超えることになるが、応神 41 年＝仁徳 87 年をそのまま西暦に直せば 430 年になる。ただし、武内宿禰の筑紫下向は応神 9 年 4 月と仁徳 55 年 12 月であり、応神天皇崩御は応神 41 年 2 月と仁徳天皇崩御は仁徳 87 年 1 月であり、月単位での違いは存在している。

[69] 直木孝次郎『日本神話と古代国家』講談社学術文庫、1990 年、214-8 頁。

題として視野に入ってくることになるだろう[70]。

おわりに

以上、高良玉垂命の正体を巡って考察してきたが、今日に至るまで諸説あってその決着を見ていない一因には、神仏習合によって様々な解釈が生じて空想も入り込んで史実が不分明となってしまったことがあった。それゆえ、本稿では、高良大社とも関係の深い大善寺玉垂宮の鬼夜伝承から藤大臣とは武内宿禰であることを明らかにしたうえで、先行研究における従来の諸説が藤大臣の条件にそぐわないことも確認しながら、三韓征伐、筑紫の政事、死没地の三条件に武内宿禰が矛盾しないことを示してきた。

さらに、高良大社における鞜や紀姓の出自の逸話が、高良玉垂命とは武内宿禰であったことを示す傍証となっていることを指摘し、石清水八幡宮の祭神や『八幡愚童訓』から武内宿禰と藤大臣が分離されていることを示した。このことから、高良玉垂命は当初は武内宿禰を祀っていたにもかかわらず、八幡信仰などの影響によって武内宿禰と高良玉垂命が分化した状況が生じてしまったことを指摘することによって、高良玉垂命の正体を巡る千年来の論争に終止符を打つことを試みてきた。

当該論争が現代に至るまで未決着であったのは、本体である武内宿禰を除外した高良玉垂命の正体を探ろうとしても、その中身が空でしかない高良玉垂命としか捉えようがない状況に陥っていたからであろう。いずれにせよ、高良玉垂命をめぐる論争には、その当時は存在していなかったにもかかわらず、後世に創り上げられた巷間の俗説が各地の神社の縁起や伝承に取り入れられてしまった可能性を示している。このことは、人間が自ら作り出した人格や神格を、自分たちが創り出したというその事実を忘れて拝み奉って祀り上げてしまう存在であることをも示しており、時代を超えてこうした問題が存在しうることを示しているのである。

---

[70] ただし、応神天皇、仁徳天皇の各々に陵墓となる古墳が比定されているという考古学上の問題があり、両天皇の妃や子女が各々別に詳細に記録されているという系譜上の問題も存在しており、同一人物説の証明には困難が予想される。

＜一次文献＞
青柳種信『筑前國續風土記拾遺 下巻』文献出版、1993 年
『愚童八幡訓　甲』、『寺社縁起』岩波書店、日本思想体系 20、1975 年所収、169-205 頁
『古事記』倉野憲司校注、岩波文庫、1963 年
『先代旧事本紀注釈』工藤浩・松本直樹・松本弘毅・訳、花鳥社、2022 年
『新訂　魏志倭人伝・後漢書東夷伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝――中国正史日本伝（１）』石原道博編訳、岩波文庫、新訂版、1985 年
『日本書紀（二）』坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注、岩波文庫、1994 年
『風土記（上）（下）』中村啓信監修・注釈、角川ソフィア文庫、2015 年

＜二次文献＞
綾杉るな『神功皇后伝承を歩く――福岡県の神社ガイドブック（上）（下）』不知火書房、2014-15 年
倉富了一『高良山物語』菊竹金文堂、1934 年
榊原英夫『景行天皇と巡る西海道歴史紀行――わが国の起源を求めて九州を歩こう』海鳥社、2006 年
『新考三潴郡誌』福岡県三潴郡小学校教育振興会、1953 年
田中俊明「『日本書紀』朝鮮関係記事と百済三書」『京都産業大学日本文化研究所紀要』第 26 号、2021 年 3 月、232-178 頁
直木孝次郎『日本神話と古代国家』講談社学術文庫、1990 年
松田康夫『久留米ん昔話』久留米郷土研究会、1978 年
水谷千秋『日本の古代豪族 100』講談社現代新書、2022 年
吉田修作「福岡の祭りに見られる恵比寿神と磯良神」、『比較文化』1 号、福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要、2004 年 3 月、69-87 頁
――「神功皇后伝承――神功皇后と土蜘蛛・羽白熊鷲」、『比較文化』2 号、福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要、2005 年 3 月、81-98 頁
――「神功皇后伝承――肥前から壱岐へ」、『人文学部』16 号、福岡女学院大学紀要、2006 年 2 月、1-21 頁
――「神功皇后伝承――筑前・筑後の境界周辺地域を中心として」、『比較文化』3 号、福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要、2006 年 3 月、15-33

頁
渡邊正氣「高良玉垂命神社」、『式内社調査報告　第二十四巻　西海道』皇學館大学出版部、1978 年所収